

〈「学びの共同体をはぐくむ学校図書館」を考えるミニ・シンポジウム〉

すべての児童・生徒にとって意味のある 探究の経験：学校における探究の文化の発展に 対するティーチャー・ライブラリアンの役割

ジェニファー・ブランチ

中村 百合子 訳

ここにうかがうことができて、本当に嬉しいです。中村先生、お招きいただき、またすべて計画していただいて、どうもありがとうございます。探究 (inquiry) について皆さんにお話すること、また私たちが『探究の重視 (Focus on Inquiry)』についてしてきたことの概観を少しお話できることに、本当にわくわくしています。いくつかポスターを持ってきました。『探究の重視』をダウンロードしても、このポスターは手に入りませんが、カナダでその本を注文すると、実は、カラフルなポスターを手にすることになるのです。

私はエドモントンにあるアルバータ大学で働いていて、私たちはティーチャー・ライブラリアンになるよう教師を訓練するオンラインのプログラムをもっています。私たちのプログラムは、1996年からオンラインで存在していて、私たちは、21世紀にむけてプログラムがどうあるべきかを再考するような時期だと判断しました。そして、これらが、私たちが新しい教育学修士プログラムで焦点を当てている4分野—探究、テクノロジー、リテラシー、情報資源—です。アルバート大学にはライブラリー・スクールもありますが、私たちのプログラムは、教育学部に置かれており、教育学修士号の学位課程です。

私たちのプログラムに来る学生は全員、すでに教師であって、すでに現場で教師をしていて、たいていは5年、10年または15年の実践の経験があります。ほとんどの学生は、すでに学校図書館で働いています。校長先生に呼ばれて、ティーチャー・ライブラリアンになるように言われ、それで彼女たち

(彼ら)は私に電話をかけてきて、「どうやってティーチャー・ライブラリアンになるかわからないのですが、どうやら私は来週か来月からその仕事をはじめることになっているようです。助けてください。」などと言ってきます。ティーチャー・ライブラリアンになる勉強をして、それから仕事を探す人たちとはずいぶん違います。ずいぶん違う経験ということです。

カナダはとても大きな国で、日本のようにすばらしい鉄道がありませんから、日本のあなた方がここで学校に行くほど簡単に授業に行けないので、人びとはオンラインで科目を履修しなければなりません。

この定義は、『探究の重視』から取り出してきたのですが、これが本当に私たちの仕事の出発点でした。私たちが本当に強く確信している部分が、この最後の小さな部分で、なんらかの行動が実際に起きるところです。探究が終わったら、私たちは児童・生徒にそのあとそれとともに何かをして、それとともに前に進んで欲しいわけです。時には社会的活動が出てきます。社会正義について話すこともあります。というのも、ホームレスや、気候の変化や、温室効果ガスという問題に興味をもったとして、児童・生徒が思いつく疑問の多くは、彼らに何かをもっとするように要求するからです。彼らの問題が何であれ、彼らは何かをもっとすることが必要だと感じます。ですので、たいていは社会的な活動がそこに生まれてきます。

いい例をお話しましょう。私の友人の一人は、幼稚園から6年生までの学校のティーチャー・ライブラリアンで、グループでの探究を行いました。3年生の児童が、彼らの教室で飼うペットに、学級のペットとして何が最適だろうかということについての探究のプロジェクトに取りくんできました。そしてそのあと、彼らが飼おうと決めたペットを、彼らは実際にペットショップに行って買いました。そのように、学習には、実際の世界でのそうした行動のようなものが含まれていました。

探究におけるティーチャー・ライブラリアンの役割は、私の見解では、またハラダ博士も私に同意してくれると思うのですが、あなたは学校のリーダーになる必要があり、また探究におけるリーダーになる必要がある、というものだと思います。そして、これらが、探究のリーダーになりはじめるべくティーチャー・ライブラリアンができるいくつかのことです。そして、はじめに、

私が思いますに、一つのモデルを採用するということがあります。それは『探究の重視』でなければならぬわけではありません。キャロル・クルトー (Carol Kuhlthau) のモデルでもいいですし、ビック・シックス (The Big Six) でもいいでしょうし、あなたの学校が使ってるものでもいいでしょうし、ただ、私が思いますに、一つのモデルを採用することと、あなたがあなたの学校でそのモデルを使うことについて先生方の合意と校長先生の合意を得ることが必要です。このモデルは、幼稚園から博士号取得まで使うでしょうが、一つのモデルを採用することとそれを使うことへの合意が必要で

す。次のステップは、先生方に模範を示すことになります。皆さんと一緒に活動する先生方の多くは、自身の学校生活の中で、いかなる探究も経験してきていないでしょうから。

私たち、カナダでは、カリキュラムをもっと、探究に基づくもの、または構成主義に移行しようと活動してきていますが、たくさんの先生方がただ探究を経験したことがないのです。私自身の人生においては、カナダで7年生の12歳だったときに、開拓者たちについてのプロジェクトをしたことを思い出すことができます。そして、隣の家に住んでいた小さな女性、お名前はリベット夫人 (Ms. Rivet) とおっしゃいましたが、その女性は私が小さな少女であったときに100歳くらいで、とても歳をとっておられました。私たちはやりたいことは何でもしてよかったので、リベット夫人について、彼女がカナダに来たことについて学びたいと思いました。彼女は開拓者でした。彼女は小さな少女であったときに両親とともに英国から来ていました。そして、カナダに来たときの生活の話を私に聞かせてくれました。

その経験が、児童としての私の経験を変え、教師としての私の人生を変えました。その学習経験、リベット夫人について学び、夫人と話し、質問をして、準備をし、それを仲間の児童たちと共有すること、それは私自身の小学校から高等学校までで思い出すことのできるもっとも力強い学習経験だったからです。

ですので、私が開拓者の単元でしたようなそうした経験のない先生方に対して、私たちはそのような探究の経験を彼らがすることを助けなければなり

ません。そして、私たちは、先生方に探究の過程を教えなければなりません。私にとってはそれが最初のステップです。百合子に次の例を話したのですが、もしも10万円が当たって休暇に出かけられるとして、私たちはそれをどのように計画するでしょう、どこに行くでしょう、どのように調査をするでしょう、どのように写真や旅行の経験を発表するでしょう。探究の経験をさせるべく、先生たちが児童・生徒と活動することができるようになるに先だって、先生たちに探究の経験を提供することが必要なのです。

そして、ライブラリアンとして本当に得意な部分がこれです。私たちは、情報資源を提供し、情報資源を収集し、情報資源を整理することに長けています。これは私たちがともかくやっていることです。なので、これは、私たちがし続けるだけのことです。

私たちが覚えておく必要があるのは、しかし、私たちが探究をするとき、児童・生徒は、私たちがたぶん期待しているのとは違うものを探さだろうということです。カナダでは、例えば、男子は本当にマンガに興味をもっています。ですから私たちはマンガを学校に入れる必要がありますし、男子のためにマンガについての情報を見つけないといけません。女子はいつも馬に興味を持っています。ですからかつてしていたよりももっと広いコレクションを形成しないといけません。もうちょっとポピュラー・カルチャーを入れなければならないくて、またそれらのものへのアクセスを提供しなければならないです。それは、ウェブサイトへのアクセスを提供することになるかもしれません。多くのそのようなポピュラー・カルチャーのものは、簡単に本には見つけられないでしょうから。ですので、子どもたちが何に興味をもつかを想像するようなことをしなければならなくて、コレクション形成はちょっと変わってきています。

そこで、これが、現実の生活において、その文書がどういうものかです。この文書は、2つめのバージョンとして書かれました。1990年にはじめのバージョンが書かれ、それは『調査の重視 (Focus on Research)』と呼ばれました。『探究の重視』は『調査の重視』とよく似た部分があって、ただ、意味のある疑問 (Meaningful Question) の部分と、過程の振り返り (Reflection on the Process) の部分が無く、さらに真ん中の部分がまったく欠けて

いました。というのも、キャロル・クルトーの仕事がやっと私たちのところに届いたのは1993年だったからです。1993年にキャロル・クルトーの本が出版しました。ですから過程の振り返りの部分が欠けていて、もっとずっと先生が児童・生徒に課す調査課題が語られていました。ですから、児童・生徒は選択肢のある探究をするのではなく、開拓者についてのレポートを書いたでしょう。

探究は重要な疑問を問います。ジェイミー・マッケンジー (Jamie McKenzie) という、教育におけるリーダーシップと教育改革について主張している人が、何冊か本を書いています。彼はすばらしいウェブサイトをもっています (fno.org)。そして、私たちは誰で、世界でいかに生きるべきかについて私たちが問う最も力強い疑問として、重要な疑問について彼は語っています。そうした類の疑問には、簡単な答えや正しい答えはありません。よい母親、父親、パートナーであるということはどういうことか？なぜ戦争に行くのか？なぜよい選択や悪い選択をするのか？そして、どのように平和を築くのかとか、ね。また、自分たちより恵まれていないほかの人たちとどう関わるのか？そして、成功をどう定義するのか？

そうした類の重要な疑問に、児童・生徒はひきこまれます。いったん探究をはじめたら、それぞれに探究のプロジェクトをもっているかもしれないけれど、私たちはまた、探究の過程の間にお互いから学び合おうでしょう。ティーチャー・ライブラリアンの私の友だちが、小学校の子どもたちとすばらしい活動をしました。彼らは虫についての探究、またはアリについての探究をしました。彼女は子どもたちが小さいときは、グループ活動をします。個別の探究に挑戦するのはとても難しいからです。小さな子たちには探究をいかに行うかについて模範を示さないとなりません。それで、グループでの探究を行うことをはじめ、小さなグループでの探究をし、そして年齢があがっていくしたがって、ペアを組んでの探究や個別の探究をするようになるかもしれません。

子どもたちは、あらゆる種類の情報資源に触れさせられる必要があります。なので、私たちは百科事典に導くだけでなく、複数の情報資源、複数の観点を含む探究へ導きます。それはライブラリアンが愛することです。

真正の評価（authentic assessment）は、私たちのリーダーシップ役割の鍵ですので、私たちはテストをする以外の評価の方法をほかの人たちが見つけることを助けられるでしょう。もし一人の児童・生徒がウェブサイトを作成したら、ウェブサイトをデザインすることについての基準を使って評価をするでしょう。その基準を使って、それがいいウェブサイトかどうかを判定するでしょう。もしある児童・生徒がパワーポイントのプレゼンテーションをし、スピーチをしたら、私たちは、よいスピーチをすることやパワーポイントの効果的な活用について知っていることを使って評価します。それが本当の評価です。現実の生活の評価です。現実の世界で彼らが行うようなことです。

探究は、継続的な振り返りをするよう促します。子どもたちと一緒に活動している間ずっと、私たちは、「何をしているの？」「何を学んだの？」「次回は何を違うようにするの？」「どう感じているの？」と問う必要があります。ですからつねに、彼らは自身の経験を振り返るでしょう。「おおこの検索はうまくいった」「この検索語はうまくいかなかった」「百科事典ははじめにあたる資料としていいとわかった」と。彼らが何をしているか、何を学んでいるか、どこに行くのか、についてたくさんのたくさんの話をするのです。

その図の外にある言葉は、子どもたちが必要とする足場です。もし、ここに戻ってはじめるなら、私たちは継続的な振り返りを促し、彼らが真性の現実世界の学びをすると、残りの人生やほかのプロジェクトに彼らはそれらのスキルを転用することができるようになります。この振り返りと本物の学びのすべてが、彼らの人生に、彼らの現実世界に、転用されます。

児童・生徒は、他者と情報を共有します。教師が、情報をもっている、知識をもっている唯一の人物ではありません。教室の子どもたちは、彼らが学んでいるどんなトピックについても、情報の達人になります。ですから、この情報を共有するということは、すべての子どもたちが先生であるし、すべての先生たちが学習者であるということです。人はすべての分野の達人になることはできないのですから。

そして、児童・生徒に、テクノロジーへのアクセスを提供することは重要ですが、それは彼らは何かをワードプロセッサに打ち出せる、それを印刷で

きるというだけのためではありません。ウェブサイトを構築するのに、そしてまた入手可能なあらゆる種類のウェブ2.0のツールを使うのに必要な種々のテクノロジーへのアクセスを、私たちは児童・生徒に提供します。また、彼らがウィキやブログやポッドキャストを作成するのに、それらのものがフィルターをかけられていたり、ブロックされていたりしていないことを確かめます。この情報を変換させる力のあるテクノロジーは本当に重要です。それはまた、児童・生徒がスカイプまたは電子メールを使って専門家たちと話ができるような手段を提供します。この情報を変換させる力のあるテクノロジーによって、私たちは電子的な情報資源を手に入れることができますが、私たちはそれによって相互に交流することもできます。

背景の知識は本当に情報で、私たちは、開始時点でそのトピックについて多くを知っているときにのみ、子どもが本当にすばらしい疑問を思いつくだろうと期待してよいのです。ですから、そのような背景知識をいくらか与えることは、私たちの仕事です。

たとえば、4年生の社会科の、コミュニティにおける人びとの役割についての単元をしていると想像してください。そのコミュニティについての背景知識すべてを構築していく間は、私たちは隅に紙を置いておくことしかできません。ある児童・生徒が「よし、何かについて、本当に、もっと学びたいな」と言ったとき、その質問を書きとめます。そして、その単元が終わるまでに、あなたは、あらゆる種類の本当にすばらしい、重要な質問が、問うことのできる状態でいくつか手に入っていて、彼らはそしてそのコミュニティについてもっと学び続けるのです。

そして、そのような本当によい重要な疑問にたどり着くためには、子どもたちは先生たちから多くの助けが必要です。私の大好きなティーチャー・ライブラリアンの一人はすばらしい戦略を使っています。彼女はそれを「簡潔な (snappy)」または「伸びる (stretchy)」質問と呼んでいます。そのティーチャー・ライブラリアンは、いつも、子どもたちに例を出します。「茶色い熊は何色ですか?」。子どもたちは答えることすらしないで、ただ、〈パン、パン〉と手を叩きます。そして次に、「ホッキョクグマの環境に温暖化の気候はどのように影響していますか」と問えば、子どもたちは“伸びる”と

手を横に広げます。

私は15歳の生徒たちとリサーチ・プロジェクトを行ったことがあります、私たちが出会って探究のプロジェクトについて話しはじめたその初日から、いい疑問にたどり着くまでには、80分の授業で8回かかりました。ですから、子どもたちが「第二次世界大戦について学びたい」から、「次の世界戦争が起きるかもしれない状況がたった今この世界にあるだろうか」に移るまでには、長い長い時間がかかるのです。これには時間がかかりますし、教師によるたくさんの足場づくりの仕事が必要です。ですから、ある単元をとおして活動をして背景の知識を発展させたあとで探究を行うのがいいのは、子どもたちが自分の疑問を精製してゆくに際して手伝ってあげられるということです。

ですから、もし私たちが、図書館を基盤とした学校図書館プログラムという考え方から、探究を基盤とした学校図書館プログラムへと、物事はいかに変化してきたかについて考えるなら、60年代から70年代に、私たちは彼らに百科事典の使い方、地図の使い方、索引の使い方、雑誌の文献への読者向けの手引の使い方を教えることに関心をもっていました。私たちが学校図書館ですることに対して、とても情報源を土台としたアプローチがとられていました。その後、パスファインダーを用いたアプローチに移って、いろいろな事項についてのパスファインダーをたくさん用意し、そしてそれらを子どもたちに与えて、彼らは立ち去り、それらを使いました。そしてその後、私たちはプロセスによるアプローチに移りました。1990年代にキャロル・クルトーの仕事はとても重要でした。そして私たちは、リサーチのプロジェクトの間に起きている認知的事象に加えて、リサーチの過程をとおして児童・生徒がもつ感情にもっとずっと関心をもつようになりました。私たちの役割は今、もっとずっと、促し役（ファシリテーター）、手引き者（ガイド）のものになっていますし、それらは大変に重要な役割です。

そして、私たちはなぜモデルを使うべきなのでしょう。なぜ探究モデルのようなモデルが必要なのでしょう。学校でモデルが必要なのはなぜでしょうか。それが役に立つのはなぜでしょうか。そして、私たちが先生方や児童・生徒とともに前に進むのをそれが助けてくれるのはなぜでしょうか。

『探究の重視』を書いていたとき、私たちはモデルをもつことが重要だと感じました。それは重要で、教師としてティーチャー・ライブラリアンとしての私たちの学習指導を助けてくれる重要なものだと感じました。その過程のどこにいても、児童・生徒は異なる感情をもっているということを私たち自身が思いだし続けられることから、私たちの助けになることから、それがとても重要だと感じました。モデルをもつことで、私たちはみんな、共通の言語で話すことができます。“私は計画の作業中です”、または“私は創造しています”、または“私は他者と共有する方法を考えています”と。そして、児童・生徒と教師とティーチャー・ライブラリアンは全員、探究学習で何をしているかについて同じ言語で話します。

私たちはモデルを児童・生徒の手引として使います。私の友人の一人は、(探究の)パズルのポスターを数片に切り分けて、ラミネート加工をしました。そして子どもたちは自分のいるパズルのどこか一部分をとり、自分たちの机に置きます。彼女は歩き回って、「あら百合子、あなたは検索をしているのね。どうなってる？何か見つけているかしら？何があなたの検索語なの？」などと聞くことができるわけです。それは児童・生徒が今どこにいるかを知るのを助けてくれます。または、そこにいるみんなが創造をしているときに、まだ計画のところにあなたがいたら、私はあなたに特別の援助を与えることができます。何が起きているかを簡単にチェックできます。みんなが机の端に青い部分を出していたら、私はみんながだいたい同じところにいることがわかるというように。

変革には時間がかかります。特に教育の変革には。そして探究は私たちの先生方に挑戦しますし、私たちの保護者に挑戦しますし、私たちの児童・生徒に挑戦します。なぜなら、彼らは以前にそれを経験したことがないからです。教師中心から、教師が児童・生徒に情報を与えることから、私たちが一部の学校で経験してきたような児童・生徒中心からの移行です。そうした学校では、児童・生徒がすべての選択をして、すべての責任をもっていました。そして多くの指導は起きていませんでした。児童・生徒がとてもコントロールしていました。学びが起きる場所へ教師として、ティーチャー・ライブラリアンとして私が学ぶところ、児童・生徒が学ぶところ、他の子どもたち

があなたから学ぶところへの移行です。それは教師として私が働くところではないし、あなたが児童・生徒として活動するところでもはやないし、それは学びの起きるところです。それは、教室で学びの起きるところで、学校図書館で学びの起きるところです。

学習において起きる感情を理解しその価値を認識することは、本当に重要です。アントニオ・ディマシオ (Antonio Dimasio) がこれについていくらかの仕事を残していますが、彼は、「私たちは感じる人びとについて考えているのではなく、考える人びとを感じています」と言っています。

もしも学校で探究の文化を創造したいのなら、それは変革です。多くの学校では過去に物事をしてきたその方法からの変化です。なぜなら探究は本当の問題や真正の問題に焦点をあてるからです。そしてそれらの本当の問題や本当の疑問は、カリキュラムから、コミュニティから、子どもの世界から、来ることがあります。

探究の文化は児童・生徒の好奇心を活用し、児童・生徒の好奇心を強調します。そうすると、彼らの興味が学びに対する興奮を起こすからです。そして、すでに作り出されて、要点がまとめられ、整理され、精製され、児童・生徒に与えられてきた教科書よりもむしろ、そこにあるのはすべての情報であって、教科書会社ではなくて児童・生徒が、実際に読み、定義し、要点をまとめるのです。そして、本当に重要な仕事のすべてが、出版者ではなくて児童・生徒に残されます。

探究の文化における鍵となるのは協働で、それは学校における大きな変革です。なぜなら、多くの先生たちは扉が閉められ孤立した学びの起きる教室のある学校に通ったからです。ティーチャー・ライブラリアンや他の先生たち、児童・生徒たちとの協働は、先生たちにとってこれから経験することになる本当の変革ではありますが、それが探究の鍵です。私たちは協働しなければなりませんし、喜んで他の人たちと一緒に活動し、他の人たちから学ばなければなりません。

ティーチャー・ライブラリアンが率先して探究者とならなければなりません。その模範を示し、その言語を使い、チアリーダーとならなければなりません。ティーチャー・ライブラリアンは、学校において、他の人たちに一緒

に活動をしたいと思わせることができるような人物なのです。

そして探究の文化を打ち立てるということは、一つの学校だけで取り組むには手に余ります。あなたを信じてくれるトップの人びとが必要です。そのビジョンを見ることができる2、3人。行くてにはかのあらゆるいろいろなことがあっても、そのビジョンと共に喜んでまっすぐ進んでくれるだろう人たち。

単に先生たちの授業準備時間に代わりを務めるだけでなく、柔軟に時間が使えて計画のための時間がとれるティーチャー・ライブラリアンが私たちは必要です。私たちの学校でのひとつの前向きな展開に、専門職の学習コミュニティが複数現れたことがあります。そこで先生たちは実際にチームで活動し、自身の専門職の進歩を実現しています。彼らは本を読み、研究を読み、教えることと学ぶことについて話しています。人びとがともに働き、ともに学び、教えることと学ぶことについて話すだろうという期待がなければなりません。

(じえにふあー ぶらんち。アルバータ大学教育学部初等教育学科准教授；
遠隔教育によるティーチャー・ライブラリアンシップ・コーディネーター)

(なかむら ゆりこ。同志社大学社会学部専任講師)

(テープおこし：ばめら りゃん。同志社大学日本語・日本文化教育センター特別留学生)